[氏名]　木岡 伸夫　　哲学倫理学専修　　**[専門分野]**　**地理哲学**（風土学）

新入生へのひとこと

「高校で倫理を選択しなかったのですが、哲学倫理学専修に入ってもやっていけるでしょうか」。こういう質問をする人は、何か決まった問題があって、それに「正解」を出すのが学問だと誤解しているのではないでしょうか。ハッキリ言いましょう。「哲学」というのは、出来上がった知識ではなく、自分で問題を考え、自分で答えを出そうとする試みである、と。

自分のテーマを、自分の頭で考え、自分の言葉で表現する――それが哲学だとすれば、昔の人が言ったり書いたりしていることは、どうでもよいことなのか。そうではない。そこに自分よりも前に、同じような問題を苦労して考えぬいた「先輩」がいる。時には先輩を頼りにして、しかし時には自力で道を切り開く、そういう気構えをもって、この専修に進むことを視野に入れてください。

講義のテーマと内容

哲学倫理学専修では、５名のスタッフが登場して、２つのシリーズにわたって講義を行う。第１シリーズは、《古典と私》。それぞれが、どんなきっかけで哲学の世界に入ったのかを、テクストにまつわる思い出を中心に語る。第２シリーズは、《現代と私》。これまでの研究生活をつうじて、現在の研究テーマにたどり着いた経緯を明らかにする。

私自身のテーマと内容は、次のとおり。

○シリーズ1：《古典と私》

テーマ：「直観と現実世界」（テクスト：ベルクソン『思想と動くもの』）

複雑を極める哲学者の理論の底には、かぎりなく単純な直観がある、というベルクソンの主張と向かい合ったときから、私の哲学への道が始まった。激動する 1960 年代の日本と世界の動き、それに自分がどうかかわったかを振り返ることで、「哲学とは何か」という問題に自分なりの答えを示したい。

○シリーズ2：《現代と私》

テーマ：「風景としての世界」

普遍性を追求するはずの哲学は、誰もが経験する「風景」を問題にしてこなかった。それはどうしてか。風景は場所によって異なる。場所の違いを問題にしない哲学は、〈一つの世界〉を信じてきたが、そのことがまさに現在問われている。西洋哲学を相対化する視点から環境危機に立ち向かおうとする風土学に、私はいかにして出会ったか、それをどう展開しようとするのか。

リ レ ー 講 義 の 参 考 文 献

○アンリ・ベルクソン『思想と動くもの』、河野与一訳、岩波文庫。

第１シリーズ《古典と私》で紹介するテクスト。収録された「哲学入門」「哲学的直観」など、分量は短くても内容の濃い論文（多くは講演原稿）から、「具体的なもの」に生涯こだわりつづけたベルクソンの一貫した思想を読みとることができる。

○オギュスタン・ベルク『日本の風景・西欧の景観』、篠田勝英訳、講談社現代新書、1990 年。

第２シリーズ《現代と私》で取り上げる「風景」のテーマに関する参考文献。日本と中国、西欧における風景への視線の違いを、豊富な事例から説き明かす。風景画や庭園、建築についても、比較文化論的な視点から新鮮な見方が示されている。

○木岡伸夫『風景の論理――沈黙から語りへ』、世界思想社、2007 年。

風土学三部作の第一弾として、本書を上梓した。哲学が「風景」を問題にしてこなかったことへの歴史的批判にはじまり、基本風景・原風景・表現的風景からなる風景経験の構造と弁証法、風景の変容に関する〈形の論理〉などのトピックを盛り込んだ(新入生には、少し？難しい)。

二回生以降に展開される授業内容（予定）
2010年度は、以下の三科目を担当する。 ○**「倫理学特殊講義a・b」**： 「風土学講義」として、前期：「近代日本における風土学的思想の展開」、後期：「風土学の理論構成」の順に展開する。 ○**「哲学倫理学専修ゼミIII・IV」(3年次)**： 2年次までの研究をもとに、卒業論文で取り組むべき研究テーマを絞り込むための助言を行う。研究発表と討論のほか、学生の関心に応じて講義やテクストの講読を交える。 ○**「哲学倫理学専修ゼミV・VI」(4年次)**： 卒業論文のテーマは、まったく自由。諸君が選んだこだわりのテーマに全力で立ち向かえるよう、私も全力で付き合うつもりである。 以上のほか、**「環境の倫理」(全学共通科目)**、**「知パス」**（前期）を担当する。大学院（M）自由科目「**人間環境学研究 a・b」(都市の風土学)**は、学部生の聴講も可能。
専門分野の紹介
1.〈風土の論理〉：「風土とは何か」を存在論的に考察する。西洋形而上学の自己中心性を相対化する「地理哲学」の地平を切り開く試み。 2.〈風景の論理〉：場所ごとに異なる世界経験を〈風景〉の概念のもとに包括し、その形成過程を構造論的・弁証法的にとらえる。風土学の認識論に相当する。 3.〈邂逅の論理〉：風土的主体同士の出会いによって開かれる〈間風土的世界〉の展望を打ち出す。風土学の実践論に相当する。 以上の三部作から成る風土学の理論を仕上げることが、私の研究者としてのライフワークである。
その分野を知るためのおすすめの図書
○和辻哲郎『風土』、岩波文庫、1979年 19世紀ドイツにおける気候風土の学（Klimatologie）と解釈学的存在論(ハイデガー)から着想を得て生まれた本書は、風土学のいまもって唯一の古典である。複数のアプローチが混在するために、各章の不統一を来たしているが、文化の多様性に対する直観は鋭く、創見に富んでいる。とりわけ風土の類型論（第二章）には、和辻自身の旅行体験にもとづく間風土的な〈邂逅の論理〉が認められる。 ○アンリ・ルフェーヴル『空間の生産』、斎藤日出治訳、青木書店、2000年。 過去の哲学は〈時間〉を重視する反面、〈空間〉の意義を根本的に反省してこなかった。マルクス主義者として20世紀を生きぬいた著者は、権力によって空間が生産される経緯を「空間の弁証法」によって明らかにする。内容は多岐に渡り、大部でかなり読みにくいが、空間の多元性を追究する風土学にとって、『風土』と同様、古典的な意義をもつテクストである。 ○九鬼周造『偶然性の問題』（京都哲学選書5）、燈影社、2000年。 「偶然性とは必然性の否定である」――この書き出しが物語るように、存在の必然性をつねに追究してきた西洋哲学に対して、九鬼は「無いことの可能性」という反対の観点から世界を捉えなおそうとする。偶然は、「独立なる二元の邂逅」を意味する。異なる風土に生きる主体同士の出会いが偶然だとすれば、本書の標的は、まさに〈邂逅の論理〉にあると考えられる。有名な『「いき」の構造』（岩波文庫ほか）も、男女の出会いに即して同じテーマを扱った名著である。 ○島岡由美子『わが志アフリカにあり』、朝日新聞社、2003年。 「飢えた数億の人を救うために自分に何ができるか」を一生のテーマとしてアフリカに渡った日本人青年島岡強の志と生き方を、伴侶となった著者が驚くべきエピソードの数々とともに紹介している。己れの風土に根ざしつつ他の風土を生かそうとする、一人の〈間風土的主体〉がここに存在する。